

報告書名：8020 運動と高齢者の咀嚼機能ならびにQOL との関係
研究者名：野首孝祠，池邊一典，佐島英則，森居研太郎，柏木淳平
所 属：大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座

目 的

本研究では、まず 60 歳以上の者を対象に、我々が開発したグミゼリーによる咀嚼能率測定法を用いて、機能歯数と咀嚼機能との関係を明らかにする。さらに高齢者の口腔の健康に関する QOL (Oral health related QOL) の指標を用い、それらと機能歯数との関係を分析し、8020 運動の意義を検討する。

研究方法

高齢者の口腔の健康に関する QOL の指標としては、国際的に用いられている Oral Health Impact Profile (OHIP, Slade and Spencer, Community Dent Health, 1994) ならびに Geriatric Oral Health Assessment Index (GOHAI, Atchison and Dolan, J Dent Educ, 1990) を用いた。

大阪府老人大学講座の受講者 1051 名 (対象 60 歳以上、平均年齢 67.1 歳、男性 56.5%) から調査参加者を募集した。調査対象者に対して、まず、日本語版 OHIP-14 ならびに日本語版 GOHAI を用いてアンケート調査を行った。次に、対象者に対して、経験年数 5 年以上の歯科医師 5 名が口腔内診査ならびにグミゼリーによる咀嚼能率 (咀嚼による表面積増加量) の測定を行った。

調査結果の分析については、調査対象者を機能歯数によって、0~19 本、20~23 本、24 本以上の 3 群に分類し、比較検討を行った。評価方法については、OHIP-14 ならびに GOHAI の各質問に対する回答を点数化し、合計点数を Sum OHIP-14 または ADD GOHAI とし、各群間で比較検討を行った。いずれの評価も、スコアが高いほど QOL は低いことを示す。統計的分析には一元配置分散分析を用い、その後 Tukey 法にて多重比較検定を行った。有意水準は 5%とした。

結果および考察

咀嚼によるグミゼリーの表面積増加量は、機能歯数 19 本以下の群では 1304 ± 796 (SD, 以下同様) mm^2 、20~23 本の群では 2111 ± 721 mm^2 、24 本以上の群では 2817 ± 681 mm^2 であり、各群間に有意差がみられた。Sum OHIP-14 は、機能歯数 24 本以上の群が、20~23 本ならびに 19 本以下の群より有意に低くなったが、20~23 本の群と 19 本以下の群に有意差はみられなかった。ADD-GOHAI については、機能歯数 24 本以上の群に比べ 20~23 本の群の方が有意に高く、また 20~23 本の群に比べ 19 本以下の群の方が有意に高くなった。OHIP-14 と GOHAI の結果に差がみられたのは、OHIP-14 は心理的、社会的な項目に重点が置かれているのに対し、GOHAI は、口腔機能に直接関連した設問が多いため、OHIP-14 に比べ機能歯数の違いをより強く反映したものと考えられる。

まとめ

機能歯数は、高齢者においては、咀嚼能率のみならず、口腔の健康に関する QOL (Oral health related QOL) とも有意な関連がみられた。また、80 歳で提唱されている機能歯を 20 本保つことに加えて、60 歳代においては 24 本保つことの意義が示唆された。